

閑話三題

山根タカ子

誰も勝てない

一名門バルセロナ大学の学生さんにバルセロナの街を案内してもらったことがある。彼女は日本語クラスを専攻しているので日本語で案内できる。将来は日本の考古学を専門にやりたい人というふれこみだった。せっかくだから普通の観光コースにはないところ、バルセロナ市内に残る古代ローマの遺跡に出かけることになった。

その朝、ホテルに迎えに来てくれて初対面をした。

「初めまして。アナマルです！」

と元気が良い。私たちも自己紹介をして、さっそくお世辞を一言進呈。

「日本語がお上手ですね」

「はい！」

と、悪びれる様子もなく自信たっぷり。

ところが、である。そのあとは何故かすべてスペイン語になってしまった。

その頃は、趣味にすぎなかったけれど、少しでもだけスペイン語（つまりスペイン語）を齧っていたので、面白がって何とかついていった。夫に通訳するほどの話題でもないのですが、女同士で簡単な会話をやりとりしながら道を歩いた。

「×××××……×××××」と言ったあと「ワカリマスカ？」だけ日本語で言ってくれる。

ヨーロッパではどこに行っても古代ローマの遺構があり、石造りの水道橋だの石畳みの街道だのがむき出しで姿をさらしている。かつてのローマ帝国の広範囲に及ぶ偉力を見せつけてくれる。

バルセロナのその遺跡は面白い見せ方だった。地下深くに原形のまま残っていた建造物の上部、つまり天井に当たる面が見学コースとなっていて、かなりの部分の床がガラス張りなのである。上から見下ろしながらリアルサイズで部屋から部屋へ辿ってゆく仕組みである。ガラスの上を歩くこともできる。（スペインのガラス？ 大丈夫かいな）と少しひやひやしながら足を乗せた。

アナマル嬢の得意分野なので張り切って説明してくれる。

「×××××……。ワカリマスカ？」のパターンが続いた。

私は解っても解らなくても大した問題ではないので、とりあ

えず「Si」と言っているうちにだんだん解ったような気持ちになってきて、気がついたら夫に通訳している羽目になっていた。

「ここはワインを造る部屋なんですって」と伝えたら、彼は平然と「見れば分るよ」と言った。

そんな調子で異国の一日が終わり、ホテルに連れ戻されやれやれとロビーに座った。

アナマルと私はすっかり仲良しになっていた。私が手帳を開くと彼女はすぐさま興味を持ち遠慮もなく覗きこむ。そして、なんと！数字が書いてあると言ってひどく驚くではないか。

「あら、日本では当たり前よ」と私。

「でも授業では『一二三四』と習っている。先週の試験にも出た。私はそう書いてマルをもらった」と譲らない。

仕方がないので私は時間をかけて、わが国での漢数字とアラビア数字の使い分けを思いつく限り教えてあげた。テーブルの飲み物も底をついたので「今日は一日ありがとう」と言つて、夫は約束どおりの時間給を払った。

けつきよく、アナマルの発した日本語は「はじめまして」と「わかりますか」だけだった。(あの程度の日本語で考古学を?)と思つたけれど、案の定彼女はその後日本には来なかった。

埴輪の突出したオツパイを見ると何故か彼女を思い出す。そして思う。

アナマルには誰も勝てない。

世界一の「阿呆か」

高校時代のG君を知っているけれど、あまり勉強している様には見えなかった。年中まっ黒になってグラウンドを走り廻っていたが、花形の野球部やサッカー部に所属するわけでもなく、ボクシングや柔道が強いわけでもない。唯、いつ見ても楽しそうで忙しそうだった。

大人になってから尋ねたことがある。

「一体何部だったの?」

「陸上部」

確かにグラウンドは陸の上だ。その頃、私たちの高校は野球部が強かった。

「あなたの様な運動神経のいい人がどうして野球部じゃなかったの?」

「俺、タバコ吸って退部になったんだ。だけど紅白戦の時はひっぱり出されてキャッチャーやった事もあるよ。あのSの剛速球を受けたんだぜ」

と自慢にもならない。他にも色々なクラブや本物の陸上部

私のスペイン語もその頃を頂点に、その後は脳の中で溶解の一端を辿った。外国語は使い続けていないとどんどん忘れてゆく。忘れたからこそ次に俳句の言葉が入る場所が出来たのだと思つている。

あの日、バルセロナの旧市街の角を曲がる時、何の弾みか、私はアナマルに印鑑を作って送る約束をしてしまった。安価な三文判だったけれど届いたのかどうか?(ま、どっちでもいいや)と思つていると、相当月日経つてからのんびりとお礼状らしきものがきて、あっけらかんと「あなたはスペイン語を大いに展開しました」と書いてあった。

私は少々あきれたけれど、後になってふと気がついた。あの日、もしかして彼女はわざとスペイン語を話したのではないか?彼女を紹介してくれた教授の親切な計らいであったのかもしれない。

「あの奥さんは今スペイン語をベンキョウしていて使いたがつている。彼女が理解できる範囲でスペイン語を話してやりなさい」

そう教授に言われていたのかもしれない。きっとそうだ。ワカリマスカの謎も解けた。アナマルも日本語を勉強していたのだから、さぞかし日本語を試してみたかっただろう。初対面の本物の日本人を相手に絶好の機会だったのだ。

にも顔を出していたらしい。なので年取った今もあちこちのクラブの同窓会からお呼びがかかるそうだ。忙しい人だ。

そんな訳で大学からの引きもなく、どこを受験したのか私には知らなかったが、運良く一流私大の文系にひっかかったらしい。魅力的な女学生がわんさといふ有名校だ。

ところが彼はどうした訳か彼女たちには目もくれず、十歳以上年上の女性に恋をしていた。美容師さんだということだった。卒業後に就職するとすぐに結婚した。

「俺よ、一生髪結いの亭主のつもりだったのに、あいつ、すぐに仕事やめてしまったんだよ」

と言うのを聞いたことがある。女の子ばかり三人も生まれて、家中で男一人孤立していると嘆いていたこともあった。どちらもちろん本気の言葉ではない。

同級生たちは一斉に八十を越えた。G君は昔ながらの家で夫婦二人で暮らしている。相変らずの無所属の体育会系で、毎週五日はジムに通い汗を流している。熊野古道を歩いたり、鯖街道を何日もかけて踏破したり、視力も問題ないので本もいっぱい読めるそうだ。見た目もなかなか若々しい。しかし、何年経つても年齢の差は縮まらない。十歳以上年上の奥さんは九十代。さすがに足腰も弱り家事もままならなくなつてきた。それまで家事などした事もない彼が何やかややっているらしい。

「お父さんは今、償いをしてるんやね」
と、或る日奥さんと娘さんが話しているのを聞いてしまった。彼は愕然としたそうだ。

「俺、何かツグナイを必要とする様なことをしたか？」
と私に言う。知らないよ、そんな事。私はふふ……と笑っているしかない。

「まあ、好きな様にやってきたけどなア」
と言っている。だって、子供がどこの高校に通っているかも知らなかつたくらいだから。

で、ごく最近のこと。久しぶりに私たちは電話で近況を語り合っていた。奥さんはいよいよ弱り、施設に入りたいと言うそうだ。私は少し複雑な思いを隠して尋ねた。

「あなたに遠慮して？」

「そうや」

「それで？」

「俺、阿呆か！ って言うたんや」

私は絶句した。

なんと思いやりに満ちた「阿呆か」だろうか。彼は最後まで自分が看てあげるつもりなのだ。心は決まっているのだ。けれどもそう言えば相手に負担を与える。「阿呆か」の一言で彼女は彼の心を読み、胸が軽くなり安心しただろう。

G君、それって世界一優しい「阿呆か」だね。と私は言い

返事はない。無視された。この年頃の男の子って物を言ったら損するかの様に口数が少ない。私も一応同調して、頑張ってねと定番の言葉でケリをつけた。

突堤を進むにつれて海風がまといつき髪が乱れる。私は首に巻いていたスカーフをはずし、三角折りにしてネックカバー被りにする。耳も首筋もすっぽりと覆われ、さ、これで安心だ。L字型に曲った突堤をさらに進む。

二、三人の男女が竿を繰っている所にさしかかった。その中の一人が針先に何やらペロンとした小さな物をいじっている。餌をつけているのかとよく見たが、何なのか正体は分からない。

「餌？ ナニ……？」

「これ、今僕が釣ったイカ。僕の今夜のおかず」

と屈託のなさそうな初老の男である。餌だなんて失礼なことを言ってしまった。

「スママセン。釣りの事は何も知らないの」

「ご主人は釣りをせえへんの？」と男。

「そう言えば」と私は遠くを思い出して、独り言のように言った。

「そう言えば釣りはしなかつたわねエ」

「しなかつたわねエ、て」

と彼は私の口真似をしながらまじまじと私を見た。

たかつた。けれども私は少々胸を打たれていたらしく、咄嗟に言葉が出なかつた。

突堤を歩いた日

海の色は空の色。波の様子は大気の表情。風は自由。雲は芸術。海岸で眺めるお日さま、特に夕日は最高だあ。

ほっこりと暖かな午後だった。波は穏やか、水面が揺れる程度である。爽やかな海風が時折チエロの音のように通りすぎる。沖合いに突き出ている長い突堤を先端まで歩いてみることにした。釣り人が数人いるだけの空と海ばかりの世界だ。

手前の方で中学生くらいの少年が一人、釣り糸を垂らしている。通りすがりにバケツの中を覗いてみると、何やら貧相な魚が一匹、隅の方にひそんでいる。

「何が釣れたの？」

「××」

「え？」

「ハゼ」

と面倒くさそうにようやく聞きとれる程度の返事が返ってくる。

「こういう岩場でハゼが釣れるのね？」

「……」

「ダンナさんは？」

私は黙って空を指差した。

「ええエー」

と男は二、三步後ずさりして驚いた。活字にするなら三ポイント位大きめのフォントで印刷したい程の「ええエー」だった。全く見も知らない人なのに、夫の死をなんでこんなに驚いてくれるのか、私の方がもつと驚いた。なんだか責任を感じて私は、もう何年も前のことですと余計な事を付け加える。

「ほなら今ひとり？」

と男はバケツの中に手を入れながら尋ねた。知らない人に独り暮らしを明かさぬ様教えられているので、一応用心して答える。

「ええ、娘といっしょですけど」

バケツから立ち上がり、ビニール袋を差し出しながら彼は言った。

「これ、娘さんと二人の今夜のおかず」

袋の中には小さな魚が七・八匹。

「見てみ。アジやつたらなんぼでも釣れるねん。心配せんでもええ。これあげるよ」

「そうオ？ ありがとうございます」

「僕ね、貧乏やから餌なしで釣ってるねん。隣りの人が撒い

てくれる餌で僕の針にもかかるねん。ほれ、あんなに釣れてるやろ」

見ると隣りの中年カップルが又も釣り糸を引き揚げてるところだ。糸の先だけではなく中ほど数ヶ所仕掛けられた針に、小振りのアジが連らなってピチピチと跳ねている。小魚の白い腹が折りからの夕日にピンク色に染まり、キラキラと例えようもなく美しい。命の美しさかもしれない。

もう一度お礼を言つて私はその場を離れ、堤防の突端まで移動した。深呼吸をする。青い空気といっしょに夕日の色も体に入ってくる。

ここまで来ると海は少し凄みをもって迫ってくる。水中を覗き込み私はぞくつとする。水深がもたらす単純な恐れだけではない。何かもっと大きなものに突き動かされ、引き込まれる感覚である。自然の力への畏れ、人間の内面の強さ優しさへの感慨、生き物の生き死にの尊厳、それらを支配している神への畏敬の念。そういったもの――。

ここでは風も自在に方向を変える。もう深呼吸どころではない。この痩せた体を持ってゆかれぬ様、手摺りに頼る。潮風のせいか手摺りは少しべととしていた。私の胸の中にも何か現実離れた奇妙な感覚が滲み出てくる。時々こういう事があるのだ。この様に靈妙な感覚がやってくる時、私はいつも何気なくそこを離れる事になっている。ほんとうに何気

なくやらないといけない。そうでないと家にまで持つて帰る事になる。突堤の先端は長居する所ではない様だ。現実の世界に戻ろう。

先程の少年がまだ同じ姿勢でそこに居た。関心を示さず通り過ぎようとしたその時、少年が顔を上げた。無表情だけれど視線の動きだけで、バケツの中を見るよう促しているのがすぐ分かった。

よし来た。君の波動をキャッチしたよ。私は本格的にしゃがみこみ、彼のバケツの中を覗き込む。二匹目のハゼだ。

「釣れたの!? さっきのより大きいじゃない。すごいやん!」少年は表情筋を少しだけ動かして、得意気な顔を一瞬表現した。男になる前の初期段階ではあるが、いわゆる獲物顔、ドヤ顔というやつだ。よしよし、その調子その調子。私も負けずに自慢してやろう。

「見て。あのおじさんにこんなの貰ったの」

私の袋に目をやり、ついに彼は声を出した。

「アジならなんぼでも釣れる」

ハハハ……なんだか愉快になる。思春期の男の子はめんどくさいけど、アジの様に新鮮だ。

小アジは唐揚げにする事に決めた。

ありがとう。突堤で出合ったユニークな人たち。そして、バケツの中の魚たち。